

と一致するもの二六、『假名文字遣』と一致するもの二三、『和字正濫鈔』と一致するもの九であるので、かなり定家仮名遣いにかかわるものを見て書き入れたと考えられる。

4 本文の文字を明示するための書き入れが五、脱字と考えられる箇所を書き入れが六、本文の誤字訂正の書き入れと考えられるもの九である。

5 一二四の歌「おとたへて」の「へ」にミセケチを施し、「え」を書き入れているが、その一方で、一二七の詞書に「たえかたし」があり、同一仮名の表記に二通りが見られる。書き入れ（二）では、五九の詞書で「をふね」と書写された直後の六〇の歌では「おふね」（「を」の書き入れ）と書写され、書き入れに複数の人物がかかわっていることを述べた。

### 主な使用文献

- 『宮崎女子短期大学紀要』第十六号抜刷（一九九〇）
- 井狩正司編著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』（笠間書院 一九九七）
- 大野晋著『仮名遣と上代語』（岩波書店 一九八二）
- 福井久蔵編著『国語学大系 仮名遣一』第六卷（国書刊行会 一九八一）
- 渡辺真理子「学生レポート 今山神社蔵『建礼門院右京大夫集』について」（『解釈』二〇二号 一九七二）
- 福島直恭「定家仮名遣の社会的意義」（『国語学』一六六 武蔵野書院 一九九一）
- 柳田征司編『論集 日本語研究 中世語』（有精堂 一九八〇）

○久松潜一 松田武夫 關根慶子 青木生子 校注『平安鎌倉私家集』（岩波書店 一九六七）

○久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』（小学館 一九九九）

○石川泰水・谷知子著『式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』（明治書院 二〇〇二）

○本井田重美評註『建礼門院右京大夫集』（武蔵野書院 一九八八）

○久曾神昇著『昭和美術館伝津守国夏筆 建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房 一九八二）

○村井順著『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂 一九八八）

○糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』（新潮社 一九八七）

○草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫集』（笠間書院 一九七八）

○今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』（勉誠社 一九九〇）

○建礼門院右京大夫集内閣文庫所蔵本影印複製

○建礼門院右京大夫集書陵部所蔵本影印複製

○建礼門院右京大夫集神宮文庫所蔵本影印複製

○建礼門院右京大夫集岡山大学図書館所蔵本影印複製

○建礼門院右京大夫集北海道大学所蔵本影印複製

○建礼門院右京大夫集群馬大学図書館所蔵本影印複製

入れている。この詞書は、朝夕、顔をあわせる側の人々に藤原隆信と結ばれたことが知られたらどんなに恥ずかしからうと思っている箇所である。意味の上から誤写とみて書き入れたと思われる。

### 三七才

○そのかみおもひかけぬところにてよ人よりも○実家宰相中將とぞいろこのむときく人（一三五 詞書）

「も」と「い」の間に○があり、ほぼ、○の右横に「実家宰相中將とぞ」の書き入れがある。

「よ人より○いろこのむときく人」と、書き入れの「実家宰相中將とぞ」について、本位田重美著『評註 建礼門院右京大夫集全釈』に、入念な考察がなされているのでこれに従う。関係箇所の要点のみ抜粋して記すと、次の通りである。

島田退蔵氏が「国語国文」の昭和九年五月号所載の論文で、「藤原隆信朝臣集」に右京大夫集の歌が三首含まれていることを指摘し、「よ人よりいろこのむときく人」は、藤原隆信であることを論証され、尔後これが定説となっている。

正元本、吉水神社本などには「いろこのむときく」の右傍に「実家宰相中將とぞ」という注記がある。これは、右京大夫が藤原朝方の女と誤り伝えられていたために、彼女と深い交渉を持つに至った相手の男が、朝方の女である実家と考えられたものと想像される。そして最初は、「なにがしの宰相中將とぞ」とややおぼめかして注してあったのを、正元本の祖本に何者かがさらに「実家の宰相中將」と書き加えたのではなからうか。

### 三七ウ

○月のひかりもほのくにてけしきえみえしなといひて人につたえ（一三五 詞書）てそのおとこはなにかしの宰相中將とそ

「けしきえみえし」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に「み」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も「けしきえみえし」であるので共通する祖本があると考えられる。この箇所は、写本異同がかなりあるが、今山八幡宮所蔵本の書き入れと同じものは見当たらない。書き入れ通りの読解は難渋を極める。

宮内庁書陵部所蔵本・彰考館所蔵本は「けしきもみえし」、無窮会神習文庫所蔵本は「けしきもみえし」、吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「けしきもみし」である。

「つたえて」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に「へ」を書き入れている。

書き入れの「つたへ」は、『下官集』の「つたへきく」、『假名文字遣』の「つたへて 傳 施」と一致する。

「宰相中將」の「宰」に、二点のミセケチを施し、「宰」を書き入れている。明示のつもりで書き入れたと思われる。

### おわりに

「書き入れ（一）」（『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号）で、二〇ウ（歌番号七六詞書）まで、今回、「書き入れ（二）」で、三七ウ（一三五 詞書）まで考察した。

1 ミセケチが施されている箇所は五〇である。

2 ミセケチの箇所の表記が九州大学図書館所蔵本と今山八幡宮図書館所蔵本と一致するもの十九であるので共通する祖本の存在が考えられる。

3 書き入れが定家仮名遣い実例と一致するもの二〇、『下官集』

書き入れている。書き入れは、定家仮名遣いに基づくことを一一八の歌のところで述べた。

○まことのみに入りし人さへ（一二八 歌）

「え」に二点のミセケチを施し、「え」の横に「へ」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も「人さへ」で今山八幡宮所蔵本と同じであるので共通する祖本があると考えられる。宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は、書き入れと同じ「人さへ」である。

しかし、三五〇の詞書に「夜さへ」とあり「へ」の右横に「え」を書き入れている。集中でも二通りの仮名遣いが見られることから、書き入れに複数の人が関わっていることは確かである。なお本文に二通りの仮名遣いが見られることは、書写当時、「さえ」「さへ」の両者が使用されていたことを示唆すると言えるか、言えないか、今後の検討課題である。

『下官集』は「風さえ」、『假名文字遣』は「けふさへあすさへ

今日副 明日副」とあり、『和字正濫鈔』巻四には「副 萬葉 さへ 詞なり。萬葉に并兼共等の字をも同じく用たり。後撰にけふさへにくれざらめやと思へともよめる哥も、今日さへになり。此外そへとよめるは見えず」とある。

したがって、書き入れは、他の写本、仮名文字遣書を見て行ったと思われる。

### 三六才

○雲井の空よたちなくしそ（一二九 歌）

「よ」の右横に「にイ」の書き入れが見られる。

九州大学図書館所蔵本も今山八幡宮所蔵本と同じ「空よ」である

ので共通する祖本があると考えられる。

寛永刊本・架蔵甲本・群書類従所収本は「空に」であるので、書き入れはこの系統の写本によると思われる。宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・内閣文庫所蔵本は「雲よ」、吉水神社所蔵本は「くもよ」である。

○さきの世のちきりにまつるならひをも（一三一 歌）

「つ」に、二点のミセケチを施して、「つ」の右横に、平仮名で「く」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本は「まくる」で、今山八幡宮所蔵本の書き入れと同じである。用例は、「人間というもののは、前世の約束には抗することはできないというこの世の習わしを」の意である。「まつる」では、意味が通じない。他の写本の表記を勘案して書き入れたと思われる。

### 三六ウ

○きみはさすかにおもひしならん（一三一 歌）

「な」に、二点のミセケチを施し、「な」の右横に「る」を書き入れている。

用例は、「あなたはそれにしてもよく知っておいででしょう」という意の箇所である。上の句同様、下の句も意味の上から訂正の書き入れをしたと思われる。

九州大学図書館所蔵本は「しるらむ」である。

無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・寛永刊本・群書類従所収本は「しるらん」であるので、この系統の写本を見て訂正したと思われる。内閣文庫所蔵本・天理大学図書館所蔵本は「知らん」、架蔵甲本は「しるなり」である。

○あさゆふみるはすかたへの人（一三二 詞書）

「る」に、二点のミセケチを施し、「る」の右横に、「か」を書き

がある。この項で定家仮名遣い実例、他の写本の状況は述べた。

『假名文字遣』「おはします 御座」、『和字正濫鈔』巻四に「御座 おまします おはします」とある。今山八幡宮所蔵本のワ行「を」を使用した「をはしまし」の拠り所は見当たらない。

### 三四ウ

○となりに庭火のふふおとするにも（一二六 詞書）

「ふ」に、二点のミセケチを施し、「ふ」の右横に平仮名で「え」を書き入れている。これは一二四の詞書のところで考察した。

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に平仮名で「を」を書き入れている。このことについては二一八の歌のところで考察した。

### 三五オ

○こと内侍所のみかくらにこれもりの少将やすたかの中将などのをもしろかりしねともまつおもひいてらる（一二六 詞書）

「こと」にそれぞれ二点ずつミセケチを施し、「こと」の右横に「としく」の書き入れが見られる。九州大学図書館所蔵本も今山八幡宮書蔵本と同じ「こと」であるので共通する祖本があると考えられる。

宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・群書類従所収本は「としく」、彰考館所蔵本は「としくこと」、架蔵甲本は「ことしく」である。「こと」の箇所は、毎年、御神楽の時、惟盛の少将や泰通の中将などが吹いたことを述べた箇所である。

「たか」の右横に「みちイ」の書き入れがある。この書き入れに関しては村井順『建礼門院右京大夫集詳解』の五十七の語釈に従う。すなわち、「やすたか」は、藤原泰通である。

「をもしろかり」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に平仮名で小さく「お」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も今山八幡宮所蔵本と同じ「をもしろかり」であるので共通する祖本があると考えられる。宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「おもしろかり」である。

『仮名遣と上代語』の「藤原定家の仮名遣実例」では、高松宮本古今和歌集「於もしろし」「於もしろく」各二例、「於もしろかり」三例、高松宮本後撰和歌集「於もしろ」一例、「於もしろかり」七例、「於もしろく」二例、「於もしろき」三例、高松宮本拾遺和歌集「於もしろかり」「於もしろう」各一例、「於もしろく」三例、「於もしろき」二例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）「於もしろし」「於もしろかり」各一例、「於もしろき」五例、「於もしろく」四例、「於もしろけれ」二例、御物本更級日記（定家自筆本）「於もしろし」二例、近代秀歌（定家自筆本）「於もしろき」一例である。

『和字正濫鈔』の巻三に「何怜 おもしろし 萬葉。古語拾遺に天照大神天の岩屋を出たまひて後、人のおもて明らかに見えける故に面白しといひけるよし見えたり。此怜は憐にて音も異なるを昔より通して用來れり。此二字を日本紀并に萬葉にうましもあはれともよめり」とある。今山八幡宮所蔵本の「をもしろかり」の拠り所は見当たらない。

### 三五ウ

○しりたる人のさまかへたるかこんといひておとせぬに（一二八 詞書）

「お」に二点のミセケチを施し、「お」の右横に、平仮名で「を」

学図書館所蔵本は、書き入れと同じ「くらさせて」であるが、宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・寛永刊本は、今山八幡宮所蔵本の本文と同じ「くらませて」である。

「心をやみにくらさせて」の口語訳は、「自分の心を闇のように暗くさせて」となり、「心をやみにくらませて」は、「自分の心は中宮に対する恋しさにたえかねて真暗になっています」となる。「心をやみに」は、他動詞「くります」に連用修飾語としてかかるを見て、かかり受けは説明できるが、意味の理解は「くらさせて」の方が円滑である。

### 三四才

○その比より積たることをひかて（一二四 詞書）

「よ」に一点のミセケチを施し「よ」の右横に「ち」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も書き入れと同じ「ちり」である。内閣文庫所蔵本は、漢字の「散」である。今山八幡宮所蔵本の「よ」の抛り所は見当たらない。

意味の上からもこの箇所は、「より」では理解できない。「その頃、塵の積もつていた琴を弾かないで」の意の詞書である。

### 三四才

○つねにちかくさふらふ人のふふにあはせなとあそひし事いみしうこひし（一二四 詞書）

「ふふ」の「ふ」に、二点のミセケチを施し、「ふ」の右横に「え」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も「ふふ」表記であるので今山八幡宮書蔵本と共通する祖本があると考えられる。

宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本

架蔵甲本・群書類従所収本は、「ふえ」表記である。

『下官集』に「笛 ふえ」、『仮名文字遣』に「ふえ 笛」「こま ふえ 高麗笛」「しやうのふえ 笛」、『和字正濫鈔』に「笛 ふえ 日本紀和名。吹てよきねを出す物なれば吹吉の意歟。又日本紀に可愛をえとよめり。おもしろき物なれば吹可愛の意にや」とある。

「ふ」表記の抛り所は見当たらない。一二四の詞書には「ふふ」とある。集中「ふふ」は二例である。

○おりくのそのふえたけのおとたへて（一二四 歌）

「おと」の「お」に二点のミセケチを施し、「お」の右横に平仮名で「を」を書き入れている。集中同例が二例ある。二五・歌、三三・歌、五三・歌、一一八・歌の所で述べた。

「たへて」の「へ」に、二点のミセケチを施し、「へ」の右横にひらがなで「え」を書き入れている。

二二七・詞書には「たえかたし」とあり、「え」の右横に「へ」を書き入れている。

『下官集』に「不堪 たへす」、『仮名文字遣』に「たへたり 堪 忍イ 耐」「うちたへて 打堪」、『和字正濫鈔』に「堪 たへ

たふとはたらけり。公任をきんたふ、長能をなかつたふ。堪任とも堪能つゝきて今のたふに同し」とあり、「え」の書き入れの抛り所は見当たらない。一二四の詞書書き入れは、『下官集』『仮名文字遣』『和字正濫鈔』と一致する。

○皇子むまれさせをはしまして（一二五 詞書）

「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。三の詞書に、「をはしまし」の「を」に「お」の書き入れ、また「おは○す」があり、○の右横に「しまい」の書き入れ

「よく」に二点ずつミセケチを施し、「よく」の右横に、平仮名で小さく「とかく」と書き入れている。九州大学図書館所蔵本も「よく」であるが、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「とかく」であるので、この系統の写本をみて書き入れたと思われる。

○月のあかき夜はしつかたに（一二二 詞書）

「あかき」の「き」の斜左下に漢字で小さく「夜」が挿入してある。九州大学図書館所蔵本も「あかきはしつかたに」であるが、無窮会神習文庫所蔵本、天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「月のあかき夜」吉水神社所蔵本は「つきのあかきよ」、内閣文庫所蔵本は「つきのあかき夜」、寛永刊本は「月あかきよ」である。「夜」の挿入は、「夜」記載の写本を見て挿入したと思われる。

○心にかかる人ゆえになを（一二二 歌）

「え」に、一点のミセケチを施し、「え」の右横に「へ」と書き入れている。

八九の歌の所で『下官集』に「このゆへ」、定家仮名遣い実例に「ゆへ」が三三例あることから定家仮名遣い系統のものをみて書き入れたものと思われることを述べた。なお、行阿の『假名文字遣』にも「このゆへ 事故 綺故」「このゆへ 所以由来」とある。

しかし、契沖の『和字正濫鈔』には「故 ゆゑ 萬葉におほし。古事記にもあり。ゆへとかくは誤來れるなり。改むへし」とある。

○いとひさしくおとつれさりし比（一二二 詞書）

「お」に二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を平仮名で小さく書き入れている。六七・詞書のところで定家仮名遣いの

実例があること、『假名文字遣』に「をとつれ 音信 音」があることから定家仮名遣いに基づいて書き入れたと思われることを述べた。

### 三三ウ

○夜ふかくねさめてとかく物おもふ○おほえす涙やこほれすけむ（一二三 詞書）

「おもふ」の次に○印が見られ、○の右横に「に」の書き入れがある。九州大学図書館所蔵本も「おもふおほえす」である。このことから今山八幡宮所蔵本と共通する祖本があると考えられる。

無窮会神習文庫所蔵本は「思ふに」、彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・群書類従所収本は「おもふに」、天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本は「思に」である。「に」の書き入れは、これらの写本を見て書き入れたと思われる。

「こほれす」の「す」に、二点のミセケチがあり、「す」の右横に、平仮名で「に」を書き入れている。「おもほえす涙やこほれすけむ」の口語訳は、「思わず涙がこぼれなかつたのであろうか」となり、「おもほえす涙やこほれにけむ」は「思わず涙がこぼれたのであろうか」となる。

九州大学図書館所蔵本は、書き入れと同じ「こほれにけむ」、宮内庁書陵部所蔵本・吉水神社所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「こほれにけん」、内閣文庫所蔵本のみ「こほれけん」である。「に」の書き入れは、意味の展開と他の写本を勘案してのことと思われる。

### 三四ウ

○こひわふる心をやみにくらませて（一二三 歌）

「くらま」の「ま」の右横に「さい」の書き入れがある。九州大

## 三二才

○おもひつゞけらるることのみさまくなり（一一五 詞書）

書き入れの「く」「る」に一点ずつミセケチが見られる。訂正のつもりで書き入れた後書き入れの間違いに気づき、書き入れの語にミセケチを施したと思われる。

○ありあけの月にあさかほみしをりもわすれかたきをいかてわすれん（一一六 歌）

「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に平仮名で小さく「お」の書き入れがある。「時」の意の「をり」については、一一五の詞書「をり」のところで述べた。

○せうとなりしほうしのことたのみたりしか山なくおこなひてみやこへいてさりし比（一一七 詞書）

「なく」に二点ずつミセケチを施し、「なく」の右横に平仮名で小さく「ふかく」と書き入れている。この箇所は、法師の兄が比叡山にこもり修行して都へ出なかったころの歌である。誤写とみて「ふかく」を書き入れたと思われる。

「おこなひて」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、平仮名で小さく「を」を書き入れている。二四七・詞書「おこなひて」の場合も「を」の書き入れが見られる。

『仮名遣と上代語』の藤原定家仮名遣い実例では、高松宮本後撰和歌集「をこなふ」一例、「をこなは」一例、「をこなひ」一例、高松宮本拾遺和歌集「をこなは（行）」一例「をこなひ」二例、御物本更級日記（定家自筆本）「をこなひ」であり、行阿の『假名文字遣』も「行 をこなふ」で書き入れと一致する。

しかし『和字正濫鈔』巻三に「行 おこなひ 衣通姫の御哥にくものふるまひといふを日本紀にの允恭天皇紀には區茂能於虚奈比と

あり。これを證とす。常にをの字用るは誤なり」と記されている。

これらの記述から「を」の書き入れは、定家仮名遣いに基づくと考えられる。

## 三二ウ

○神かきや松のあらしもおとさえて霜にしもしく冬の夜のつき（一一八 歌）

「お」に一点のミセケチを施し、「お」の右横に、平仮名で小さく「を」を書き入れている。

集中「おと」の「お」の右横に「を」を書き入れた用例は二一例であること、藤原定家の仮名遣い実例は、九一例あること、また、藤原定家の『下官集』に「風のをと」、行阿の『仮名文字遣』に「をとなし川 音無川」があることから、「を」の書き入れは、藤原定家仮名遣い関係のものをみて書き入れたと思われる旨、九ウ、二五の歌の項で述べ、さらに『国語国文薩摩路』第三八号でも述べた。しかし、契沖『和字正濫鈔』に「音 おと 萬葉集におほし。をと書へからす」とある。

## 三三才

○をなし事をよくおもひて月のあかき夜（一二一 詞書）

「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に、平仮名で小さく「お」を書き入れている。集中「をなし」一一例、「をなく」二例あることを『国語国文薩摩路』第三八号で述べ、六・詞書の所で他の写本が「おなし」であること、『下官集』に「おなし事」、行阿の『仮名文字遣』に「おなしこと 同事」があることを述べた。

契沖の『和字正濫鈔』も「同 おなし 日本紀并萬葉におやじともいへり。同韵にて通する歟。別に古語歟」とある。「をなし」表記の拠り所はわからない。

作者の自宅を訪ねた時を思い出している箇所で、「それから年月が多く積もったけれども、心には近くの出来事のように思い出されるのも返す返す困ったことである」の意である。「つもりぬれ」では順接になり、下接の連用修飾語として不自然である。訂正のつもりで書き入れたと思われる。

### 三ーウ

○山さとなるとこにありしをりえむなるありあけにおきいて、

(一一五 詞書)

「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を平仮名で小さく書き入れている。九州大学図書館所蔵本も今山八幡所蔵本と同じ「おり」であるが、他の写本である宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「おり」である。

この「おり」は、「時」の意である。集中同例が、一五・詞書を含めて七例ある。すなわち、一・詞書、四・詞書、六・詞書、一五・詞書、一六・歌、一九九・詞書の六例、歌一例である。二〇四・詞書「をり」を含めると七例になる。

なお、二四七・詞書に「いひしおり」があり、「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を「お」の右横に小さく書き入れているところから統一が見られず、書き入れは複数の人がかかわっていることも考えられる。

『下官集』に「おりふし」、『假名文字遣』に「おりふし 境節 折節」がある。『和字正濫鈔』卷三に「時節 をりふし 折節とも 借て書に、折の假名をりなり。(時の字をよりくとよむはをとよと同韻にてをりくなり)」とある。

『假名遣と上代語』の藤原定家の假名遣実例では、高松宮本古今和歌集「於り(時)」一〇例、高松宮本後撰和歌集「於り(時)」四例、高松宮本拾遺和歌集「於り(時)」三例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於り(時)」三例、御物本更級日記(定家自筆本)「於り(時)」二例、「於りふし」一例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於り(時)」七例、近代秀歌(定家自筆本)「於り(時)」一例である。この実例から、書き入れは、定家の假名遣い系統の書を見て書き入れたと思われる。

○まつちかきすいかいにさきたりしあさかほをたゝ時のまのさかりこそあわれなれとみし事も(一一五 詞書)

「わ」に、二点のミセケチを施し、「わ」の右横に、平仮名で小さく「は」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本は書き入れと同じ「あはれなれ」、天理大学図書館所蔵本は「あはれ」である。

集中、七〇・詞書「あわれしに」、七八・詞書「あわれにて」、一五・詞書「あわれなれ」、一九二・詞書「あわれに」、二二〇・詞書「あわれに」、二三四・詞書「あはれなれ」と六例あり、いずれも詞書である。

假名遣いについては、すでに、七〇・詞書、七八・詞書のところで述べた。

○なへて○ななきためしにあらさりけるなと(一一五 詞書)

「なへて」の次に脱字を示す○印があり、その右横に平仮名で小さく「はか」と書き入れがあり、さらに、「ななき」の「か」に、二点のミセケチが見えるが、「か」の右横の書き入れはない。この箇所の意味は「一般にたよりない例にならないことなど」とである。○の箇所は脱字と見て「はか」を挿入したと思われるが、「ななき」の「か」のミセケチの拠り所はわからない。

に「えそしらぬ 得不知」、『和字正濫鈔』巻四に、「えならぬ」とあり、今山八幡宮所蔵本の「ゑ」の拠り所は見当たらない。書き入れの「え」は陳述の副詞で打消の語「で・ぬ・まじき」と呼応して不可能をあらわしている。「ふえ」については、一二六・詞書のところで述べる。

「くちをしくて」の「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に、平仮名で小さく「お」を書き入れている。同例が、二〇四・詞書（「くちをしき」）にある。定家自筆本である御物本更級日記に「くち於し」が、『下官集』に「おしむ」、『仮名文字遣』に、「おしむ おしきおしきとも 惜 なりおし 名残惜 餘波惜」、『和字正濫鈔』巻三に「惜 をしむ 日本紀萬葉 おしむと書へからず。池にすむ名をゝし鳥とつゝけたるはかなよく叶へり」の記述がある。今山八幡宮所蔵本の書き入れは、定家自筆本、『仮名文字遣』と一致している。

## 二九才

○くちをしくて御すゝりのはこにうすやうのはしに書つけておく

### （二一〇 詞書）

「おく」の二字にそれぞれ二点のミセケチを施し、「おく」の右横に、平仮名で小さく「をく」と書き入れている。類似語に「かきおく」（六九 歌）がある。九州大学図書館所蔵本も「おく」であるが、宮内庁書陵部所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は「をく」である。

『下官集』に、「草木をうへをく」、『仮名文字遣』に、「うへをく栽植 木草ヲ一置也」とある。書き入れは、他の写本、定家仮名遣いに基づくと思われる。『和字正濫鈔』巻三には「置 おく 日本紀萬葉和名。をくと書へからず」「除 日本紀。我をおきて君をお

きてはなと」とある。

## 二九ウ

○さとなりし女坊の（一一一 詞書）

「女坊」の「坊」に二点のミセケチを施し「坊」の右横に「房」を漢字で小さく書き入れている。同例が、一六四の詞書にある。漢字「坊」を誤字とみて訂正したと思われる。

## 三〇ウ

○兼光の中納言のしきなりしころむくを六つゝみておこせたるに

### （一二三 詞書）

「お」に二点のミセケチを施して、「お」の右横に「を」を書き入れている。「おこせ」については、二二ウ・八四の詞書のところで述べた。

## 三一才

○かれのゝおり物のかりきぬすはうのきぬむらさきのおり物（一一

### 四 詞書）

二つの「おり」にそれぞれ二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。「おり物（織物）」については、二二ウ・三の詞書「おりたりし〇めしたりし」で取り上げて説明した。「織物」の意の「おり物」は、集中二例（一一四・詞書）である。「をり」は、定家仮名遣い、行阿の『仮名文字遣』と一致、「おり」は、『和字正濫鈔』巻三「織 おる 日本紀萬葉和名等。」と一致している。

○とし月おほくつもりぬれは心にはちかきも返々むつかし（一一四 詞書）

「は」に、二点のミセケチを施し、「は」の右横に、平仮名で小さく「と」と書き入れている。この詞書は、雪が深く積もった朝、

かりになる。

○かきくらす夜のあめにも（一〇二 歌）

「夜」に、二点のミセケチを施し、「夜」の右横に小さく「よる」と平仮名で記されている。「夜」のくずし文字が判読できないと見て書き入れたと思われる。

○おとつるゝしくは袖に（一〇四 歌）

「おとつるゝ」の「お」の右横に、小さく「を」を書き入れている。一九オ・六七の詞書、二四ウ・九三の詞書のところで定家仮名遣いによる書き入れであることを述べた。

## 二八ウ

○なりちかの大納言のとをき所へくたられにし後院の京極とのゝ御も〇へ（一〇六 詞書）

「御も〇へ」の「〇」の右横に、平仮名で小さく「と」が書き入れている。ここは「成親の大納言が、遠くへ流されてしまわれた後、御白河上皇に仕えている京極殿のもとへ」の意の箇所であり、脱字と見て書き入れたと思われる。

## 二九オ

○日にそえてあれゆくやとおもひやれ人をしのふの露にやつれて（二〇九 歌）

「そえて」の「え」に二点のミセケチを施し、「え」の右横に小さく平仮名で「へ」を書き入れている。

『下官集』に「そへ」、行阿の『仮名文字遣』に「そへて そひて共 添 副 備 進」がある。「え」の右横に「へ」を書き入れた用例について、二四オ・八九の歌のところで述べた。書き入れは定家仮名遣いに基づくと思われる。

なお、九州大学図書館所蔵本も今山八幡宮所蔵本と同じ「そえて」

である。彰考館所蔵本は「そひて」、宮内庁書陵部所蔵本・無窮会

神習文庫所蔵本・古水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所集本は「そへて」であり、書き入れは写本に一番多い「そへて」である。今山八幡宮所蔵本の書き入れは多くの写本との照合の後になされたと思われる。

○安元といひしはしめのとしの冬りむしのまつりに宮のうへの御つほねへのぼらせ給御ともにまいる事ありてゑまいらでさしも心にしむかへりたちのみかくらえみさりしくちをしめて（一一〇 詞書）

「まいる」の三文字に二点のミセケチを施して、「まいる」の右横に「さはる」と小さく平仮名で書き入れている。この箇所は、「安元と呼んだ元年の冬、賀茂の臨時の祭りの日に、中宮が清涼殿の上の御局へお登りになるお供に、私はさしかえがあつて、参上できず」の意の箇所である。「まいる事ありてゑまいらで」では、「参上することがあつて参上しないで」なり、不自然な展開になる。誤写とみて書き入れたと思われる。

「ゑ」に二点のミセケチを施して、「ゑ」の右横に「え」を平仮名で小さく書き入れている。九州大学図書館所蔵本も今山八幡宮所蔵本と同じ「ゑまいらで」である。内閣文庫所蔵本は「えまいらせ」である。

宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・古水神社所蔵本・寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・群書類従所収本は「えまいらで」である。

集中、「ゑ」の右横に、「え」と書き入れたものに「ゑまいらで」（一一〇 詞書）、「ゑゑ」（一二六 詞書）の二例がある。

『下官集』に「えあるましきこと」「えそしらぬ」、『仮名文字遣』

和歌集六例、拾遺和歌集九例、前田家本定頼集三例、更級日記四例  
伊勢物語二例とあるので、定家仮名遣い系統のものを<sup>お</sup>見て書き入  
れたと思われる。

集中「え」の右横に「へ」と書き入れた語例が「ゆえ」を含めて  
八例（「やえ」「日にそえて」「たえ」「たとえ」「つたえ」「あえなく」  
「つかえ」）ある。

「たおりつれ」の「お」に二点のミセケチを施し、「お」の右横  
に「を」を書き入れている。

『下官集』は「花をおる」で、あ行の「お」を表記している。行  
阿の『仮名文字遣』も「花をたをる 手折花 をるときはお也」と  
ある。しかし、『和字正濫鈔』は「折 をる 萬葉。おると書へか  
らず。」と述べている。今山八幡宮所蔵本の書き入れは『和字正濫  
鈔』と一致する。

## 二四ウ

○なとかこのたよりにおとつれはせぬとのたまひしかば（九三 詞  
書）

「おとつれ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横  
に「を」を小さく書き入れている。一九才、六七の詞書のところで  
考察を記した。集中の用例は、「おとつるゝにも」（六七 詞書）、  
「おとつれ」（九三 詞書）、「おとつるゝ」（一〇四 歌）、「おとつ  
れ」（一二二 詞書）、「おとつれ」（一五九 詞書）、「おとつれし」  
（一二二 詞書）、「おとつれ」（二三九 詞書）、「おとつれて」（三  
四〇 歌）の八例である。詞書六例、歌二例で詞書に多い。すべて  
「お」の右横に「を」を小さく丹念に書き入れている。一二二の詞  
書でさらに述べる。

## 二五オ

○はる〇ころみやの西八条にいてさせ給へりしほと（九四 詞書）

「はる〇ころ」の「〇」の右横に小さく「の」を書き入れている。

今山八幡宮所蔵本と同じ「はるころ」の写本は九州大学図書館所蔵  
本のみで無窮会神習文庫所蔵本・彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本は  
「はるのころ」、内閣文庫所蔵本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本  
は「春の比」、寛永刊本・群書類従所収本は「春のころ」である。

この箇所は今山八幡宮所蔵本と九州大学図書館所蔵本との祖本考察  
の資料になる。九州大学図書館所蔵本以外の九つの写本は「の」が  
記入してある。脱字と見て書き入れたと思われる。

## 二七オ

○なさけおくことの葉ことに身にしみて涙の露そいとこほるゝ

（二〇〇 歌）

「なさけおく」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右  
横に小さく「を」の書き入れがある。この書き入れは定家仮名遣い  
によることを、九ウ・二二の詞書、一〇オ・二九の歌、一一オ・三  
三の歌、二〇オ・七六の詞書で述べた。

## 二八オ

○小松のおとゝうせ給てのちその北のかたのかとへ（二〇二 詞書）

「平重盛がなくなられて後、その奥方のもとへ」の意の箇所であ  
る。「かとへ」の「か」の右横に小さく「も」の書き入れが見られ  
る。誤写とみて書き入れたと思われる。九州大学図書館所蔵本も  
「かとへ」であるが、宮内庁書陵部所蔵本・無窮会神習文庫所蔵本  
は「もとへ」、彰考館所蔵本・吉水神社所蔵本・内閣文庫所蔵本・  
寛永刊本・天理大学図書館所蔵本・架蔵甲本・群書類従所収本は  
「御もとへ」であり、写本異同がある。写本の系譜を見ていく手が

書にあり、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたものであることを述べた。集中に「をなしおとゝの」(五七 詞書)、「をなし事」(一一三 詞書)、「まつりの目をなし人」(一四三 詞書)、「をなし比」(一四八 詞書)、「をなし事」(一九六 詞書)、「をなしこと」(一九八 詞書)、「をなしこと」(二二四 詞書)、「をなし世」(二二七 歌)、「をなしゆかり」(二三四 詞書)、「をなしたけなるをませて」(二三五 詞書)「たゝをなしことをのみ」(二三八 詞書)、「をなしくは」(三五九 歌)の例がある。歌は二例で、他は詞書に見られる。

「還向」は建春門院が内裏からお帰りになる意で用いてあるが、「天子が行幸先からお帰りになる」意の熟語に「還幸」があるので訂正のつもりで「向」の右横に「幸」を書き入れたと思われる。なお、無窮会神習文庫所蔵本のみ書き入れと同じ「還幸」である。九州大学図書館所蔵本は今山本八幡宮所蔵本と同じ「還向」、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、天理大学図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「還御」である。

### 二三ウ

○をしむ心のかきりなりけれ(八七 歌)

「をしむ」の「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく書き入れている。六の詞書「いかに命もをしくて」の「を」の右横に「お」の書き入れがあり、書き入れは定家仮名遣い実例から定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる旨述べた。集中、「をしくて」(六 詞書)、「をしむ」(八七 歌)、「をしけに」(八八 詞書)「をしむらん」(八八 歌)の四例が見られ、詞書二例、歌二例である。

「くちをしく」(一一〇 詞書)、「くちをしき」(二〇四 詞書)

の「を」にいずれも二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく書き入れている。前田家本定頼集(定家自筆本)の「くち於しけれ」の例が見られるので定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

○かへしらへしろき菊のうすやうに(八八 詞書)

「ら」に二点のミセケチを施し、右横に、「う」を小さく書き入れている。前後の意味と仮名遣いの面から誤写とみて書き入れたと思われる。『下官集』に「うへのきぬ」、『假名文字遣』に「うへのきぬ 袍衫 表衣」、『和字正濫鈔』に「上 うへ」がある。

○まことに世のけしきをしけに(八八 詞書)

「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。八七の歌のところで述べた。

○立ちかへる名残をなにとをしむらん(八八 歌)

「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく書き入れている。「をしむ」は、八七の歌のところで述べた。

### 二四オ

○君ゆえはおしきのきはのみちをもおしからてこそかくたおりつれ(八九 歌)

「え」に二点のミセケチを施し、「え」の右横に「へ」を書き入れている。集中に同じ例が「人ゆえに」(一一二 歌)、「なにゆえに」(二四五 歌)、「なにゆえに」(二八六 歌)あり、いずれも「え」に二点のミセケチを施し、「え」の右横に「へ」を書き入れている。

『下官集』に「ことのゆへ」「ゆへ」「ゆへ(水戸本「え」トアリ)」を」とあり、さらに、大野普著『仮名遣と上代語』定家仮名遣い実例「特殊な語彙の仮名遣い」「ゆへ(故)」に古今和歌集八例、後撰

とあり、「あはれに」の「は」を「わ」と表記した今山八幡宮所蔵本のより所はわからない。ある人が「手習いのつもりで書いてください」といって、絵の説明を書かせたものがまじっていた。それを見て感慨無量で、の意の箇所である。

## 二二オ

○君か代にひきくらふれはあやめくさな<sup>て</sup>な<sup>ふ</sup>してふねもあかすそありける（八一 歌）

「て」「ふ」ともに二点のミセケチを施して、小さく「て」「ふ」と書き入れている。「といふ」の約言である。「て」「ふ」の表記であることを明示するつもりで書き入れたと思われる。

○なけくことありてこもりゐたりしころさうふのねををこせたる人に（八三 詞書）

「し」に二点のミセケチを施し、小さく「し」を書き入れている。「悲しみがあつて、家に閉じ籠っていたころ、菖蒲の根をくれた人に」の意の箇所「し」の表記であることを明示するつもりで書き入れたと思われる。同例が「はてとしもなし」（二五〇 歌）「かはらし」（二五四 歌）、「まさるらし」（三〇四 歌）、「よしもなし」（三二五 詞書）、「おほえし」（三五九 地の文）とあり、歌四例、詞書一例、合計五例である。

## 二二ウ

○なりちかの大納言の女君の権亮これもりのうへなりし人はしか<sup>ろ</sup>かりありしもとよりくすたままおこすとて（八四 詞書）

「しか」の「か」に一点のミセケチを施し、小さく「る」を書き入れている。意味は、「私が知っているゆかりのある人のところから薬玉をくれると言つて」であり、「しか」では意味が通じない。

「くすたままおこす」の「ま」「お」にそれぞれ二点のミセケチ

が施され、「お」の右横に「を」の小さな書き入れがある。「を」の書き入れは「ま」の右横に置くべきだと思う。

集中に同じ用例が、「つゝみておこせたる」（一一三 詞書）、「いひおこせたりし」（二八四 詞書）と詞書に二例見られ、「を」の書き入れがしてある。

『仮名遣と上代語』の「藤原定家の仮名遣実例」を見ると、高松宮本古今和歌集「をこせ」五例、高松宮本後撰和歌集「をこせ」二例、「をこする」四例、高松宮本拾遺和歌集「をこせ」一四例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）「をこせ」三例、御物本更級日記（定家自筆本）「をこす（ヨコス）」六例、「をこせて（を寄越せて）」二例がある。書き入れは定家仮名遣いと一致する。

行阿の『假名文字遣』に、「おこする人もし」がある。『和字正濫鈔』卷三に「遣 おこす 文や物などをくるゝなり。遊仙窟點。假名は萬葉」とある。本文は、『假名文字遣』『和字正濫鈔』の語例と一致する。

## 二三オ

○秋のすゑつかた建春門院いらせおはしましてひさしくをなし御所なり九月つくるあす還向あるへきに女官してあしてのしたゑのたんにたてふみくれなゐのうすやうにて（八七 詞書）

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施して「を」の右横に、「お」の小さな書き入れ「還向」の「向」に二点のミセケチを施して「向」の右横に「幸」の書き入れが見られる。「女官」の「官」に消したような棒状のミセケチが見られ、「官」の右横に小さな文字の「官」の書き入れがある。「官」のくずし字が適切でないとしてミセケチを施し、書き入れたと考えられる。

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施したものは、六の詞

# 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ (二)

田 中 司 郎

## はじめに

平成元年六月から七月にかけての国文科研究の対象にふさわしいものとし、翻刻作業を行う過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合が出てきた。

これらをまとめて、解題の項目で『宮崎女子短期大学紀要』第十六号に掲載して各方面からのご教示をいただく予定だったが、他の写本とのつきあわせ、先行文献に目を通す時間が原稿締切日までになく、必要最小限の解題をつけて、『宮崎女子短期大学紀要』第十六号に翻刻した。

その後、今日まで、四名で翻刻した今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を、筆者は、国文科演習の教材として使用してきた。

本稿はこの国文学演習の資料として考察したものである。未熟な箇所が多々あると思われる。各方面からのご教示をお願いする。

なお、ミセケチ右横の仮名の書き入れは、筆者が、平成六年三月『国語国文薩摩路』第三十八号に投稿したものを、今回改稿した。『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ」(一)では、二〇オの途中まで考察した。今回の(二)は、二〇オの途中から始める。

## 二〇ウ

○浦見てもかひしなればすみのおふてふくさをたつねてそみる (七六 歌)

「おふてふ」の「ふ」に、二点のミセケチがある。「ふ」の表記であることを明示するために書き入れたものと思われる。「住吉に生えているという忘れ草を捜してみましたのです」の意の箇所である。

○中宮の御かたへまいらせさせ給へ○しなかにむかしてゝのもとに (七八 詞書)

「まいらせさせ給へ○し」の「○」の箇所には黒い丸印が見られ、その横に「り」の書き入れがある。脱字と判断して書き入れたものと思われる。中宮の方へさしあげなされた中に、昔、父の所へ、の意の箇所である。

## 二一オ

○人のてならひしてとてことはかゝせしゑのましりたるいとあわれにて (七八 詞書)

「あわれにて」の「わ」に、二点のミセケチがあり、右横に「は」を小さく書き入れている。集中七〇の詞書、一一五の詞書、一九二の詞書、二一〇の詞書、三三四の詞書と、六例いずれも詞書に見られる。一九ウの七〇詞書で考察した。『下官集』に「あはれひ」